

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18467

研究課題名(和文)「災害文化学」の構想～東日本大震災後の文化実践を事例に～

研究課題名(英文)"Disaster Culture Studies" - A Case Study of Cultural Practices after the Great East Japan Earthquake

研究代表者

日高 勝之(Hidaka, Katsuyuki)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：00388787

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,500,000円

研究成果の概要(和文)：大災害については、災害の被害、影響、復興その他様々な研究があるが、大災害後にいかなる文化活動が社会や地域で生まれるのか、それは大災害前とどう異なるのかなどについての研究は乏しい。本研究は、東日本大震災、および福島原発事故を事例に、巨大災害後のメディア文化研究を多角的に探究した。研究成果は、書籍『「反原発」のメディア・言説史：3.11以後の変容』(2021年、岩波書店)、英語書籍 Japanese Media and the Intelligentsia after Fukushima: Disaster Culture(2022,Routledge)その他で国内外に発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大災害については、災害の原因(自然的原因、社会的原因など)、災害の被害、影響、復興その他様々な研究領域があるが、大災害後にいかなる文化活動、文化実践が生まれるのか、それは大災害前とどう異なるのかなどについての研究は乏しい。本研究は、東日本大震災、および福島原発事故という21世紀はじめの日本の巨大災害後のメディア文化に関する研究を包括的に探究した点で、オリジナリティの高い学術的意義がある。また、21世紀初頭の巨大災害後の社会的言説の歴史的記録の社会的意義がある。さらに、研究成果を、日本語のみならず英語の単著書籍を通して発信したことに学術的、社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：While there have been various previous studies on the effects of disasters, their reconstruction, and other topics, there is a lack of research on what kind of culture emerges after a catastrophe and how it differs from that before a catastrophe. This study explored media and culture in the aftermath of the Great East Japan Earthquake and the Fukushima nuclear power plant accident as examples. The research results were published through the book "Media and Cultural History of 'Anti-Nuclear Power': Transformation after 3.11" (2021, Iwanami Shoten), the English book Japanese Media and the Intelligentsia after Fukushima: Disaster Culture (2022, Routledge). In addition, there are numerous articles and research presentations regarding this research project.

研究分野：メディア研究、文化社会学、政治コミュニケーション論

キーワード：東日本大震災 福島原発事故 災害 原子力事故 メディア 文化 知識人 科学者

### 1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後、および福島原発事故後は、災害報道、緊急報道などジャーナリズムのあり方が検証されてきた(伊藤守2012; 遠藤薫2012 他)。だが、幅広い文化活動領域が震災と原発事故を機にいかなる断絶と変容を経験したかについての検証は、十分になされていない。また一部の巨大災害後のメディア文化領域については欧米で一定の研究蓄積が見られるが、その他の各国の巨大災害後の状況については研究が進んでおらず、「巨大災害後の文化活動」をめぐる人間の営みは体系的に整理されずにいる。だが、巨大災害後は、「災害文化」とでも呼ぶべき文化空間が生まれ、各ジャンルで災害を意識した作品の制作が活性化する。また、東日本大震災では震災から年月が経過する中で、ジャンルの垣根を超えた文化プロジェクトや、被災地コミュニティが協同参加し、地域再生と融合するケースもある。これら震災後の取り組みは、大災害後の社会的レジリエンスと関係するものだが、必ずしも研究対象となつてこなかった。

また、福島原発事故後は、新聞、テレビ、雑誌などのメディア、知識人、科学者、市民運動家、一般市民による原発をめぐる多彩な言説が幅広く発信された。これらについても必ずしも十分な研究対象となつてこなかった。福島原発事故は、チェルノブイリ原発事故と並ぶ史上最大規模の原発事故であるため、こうした言説は研究の俎上に載せる重要性が少なからずあると思われる。

### 2. 研究の目的

本研究は、国家や社会に甚大な影響を与える大地震や原子力事故などの「巨大災害後」の文化活動のありようと被災地域での取り組みを包括的に検証し、整理を行うことで、知的遺産として次世代、後世に継承する「災害文化学」の構想を試みる。本研究は、東日本大震災後、福島原発事故後の文化と被災地域の取り組みを事例にその構想を試みる。

2011年3月の東日本大震災は甚大な被害と多くの犠牲者、原発問題の影響から、「震災前」「震災後」と形容されるように、震災後は、「震災」「復興」「再生」を意識した文学、音楽、映画、アート、文化イベント、地域活動が無数に生み出され、「震災文化」「災害文化」とでも呼ぶ文化空間が生成している。

文化表現領域は、巨大災害および災害後の社会を映し出しているながら、(1)それがいかなる「災害観」「災害後の社会観」を構築するか、(2)大災害前の思想・価値観とどう異なるのか、(3)被災地域や被災者はそれらにどう関与してきたか、については注目されない。また各国の巨大災害後の文化のありようの理解の共有も進んでいない。本研究は、東日本大震災、福島原発事故を事例に、巨大災害後の社会のありようを文化表象・表現という切り口から浮き彫りにする「災害文化学」を構想する。

### 3. 研究の方法

「災害文化」を構成する文化活動、表現領域を横断的に検証し、東日本大震災後、福島原発事故後の震災や原発災害が意識された文化表象空間に比較メディア論的にアプローチするため、主に、新聞、テレビ、ドキュメンタリー映画、劇映画、知識人、科学者、市民運動家、一般市民などの言説、表象、活動を考察・検証の対象とし、研究方法はメディア文化研究のアプローチを基底に据えながら、学際的なアプローチを採用する。

### 4. 研究成果

研究期間内の広範な研究成果を総合し、研究書籍(単著書籍)『「反原発」のメディア・言説史 3.11 以後の変容』(岩波書店、2021年)、英語研究書籍(単著書籍) *Japanese Media and the Intelligentsia after Fukushima: Disaster Culture* (Routledge, 2022)によって、日本語と英語の研究書籍を通して、国内外に研究成果を発信した。このほか、数多くの研究論文、国内外での研究発表、講演等(海外からの招待講演など含む)を通して研究成果を幅広く発信した。

研究成果の中でも、特に上述の日本語と英語の2つの研究書籍は重要である。『「反原発」のメディア・言説史 3.11 以後の変容』(岩波書店、2021年)では、福島原発事故後の、メディアや知識人、科学者などの「反原発」の高まりに注目した。事故以前はマイノリティであった「反原発」志向が、事故後に、なぜ、どのように変化したのかを、新聞、テレビ、フリージャーナリスト(広瀬隆、鎌田慧、田原総一朗ほか)、科学者(武谷三男、高木仁三郎、小出裕章ほか)、人文社会系知識人(中沢新一、加藤典洋、笠井潔、小熊英二、安富歩ほか)、劇映画、ドキュメンタリー映画などを研究対象として、包括的な分析と検証を行った。その際、ナンシー・フレイザーの「メタ政治的正義」の概念、ピエール・ブルデューの「界」概念などを分析の補助線とした。

本書では、福島原発事故後のメディア・社会言説が、誰・何と敵対するか、核(潜在的核保有、核武装など)とどう関連づけるのか、あるいはしないのか、また、地球温暖化や気候変動の問題と原子力エネルギーの問題をどのように関連づけるのか、あるいはしないのかなどの問

いを念頭に置いて分析を行った。さらには、人文社会系知識人の言説は、科学者やメディアの言説といかなる相違があるのか、また、日本の人文社会知の知的伝統や各専門分野とどう関連付けて議論が展開されるのかを検証した。本書の最後では、2020年からのコロナ禍における政治やメディアの言説のあり方を、福島原発事故後のあり方と比較して議論を行った。

英語研究書籍（単著書籍）*Japanese Media and the Intelligentsia after Fukushima: Disaster Culture* (Routledge, 2022)においては、上述の日本語研究書籍の内容をもとにしながらも、「災害文化 (disaster culture)」の視点をより前面に打ち出し、2001年のアメリカ同時多発テロ後の欧米での知見も参照しつつ、21世紀初頭の日本の巨大災害としての福島原発事故後の状況について、よりグローバルな視座、歴史的な視座から分析と検証を行った。

この英語書籍の刊行後、トルコ・コチ大学アジア研究センターからの招待講演を行うなど、海外での講演や発表の機会を数多く得ると共に、関連の研究成果を別の英語書籍（共著）*Japan's Triple Disaster: Pursuing Justice after the Great East Japan Earthquake, Tsunami, and Fukushima Nuclear Accident* (Routledge 2023)で明らかにすることなどによって、研究成果を国内のみならず海外においても幅広く発信することが出来た。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 日高勝之	4. 巻 51
2. 論文標題 コモンセンスと「令和日本のデザイン」先崎彰容氏の問いとその行方を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日高 勝之	4. 巻 3
2. 論文標題 安斎育郎著『私の反原発人生と「福島プロジェクト」の足跡』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館アジア・日本研究学術年報	6. 最初と最後の頁 175～178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34389/ritsumeikanasiajapan.3.0_175	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日高勝之・烏谷昌幸・山口仁・笹田佳宏	4. 巻 21
2. 論文標題 復興を問い続ける 終わりなき震災報道	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ジャーナリズム&メディア	6. 最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日高勝之	4. 巻 3
2. 論文標題 「メタ政治的正義」としての原発・エネルギー議題～フクシマ以降の「原発議題」言説の検証必要性～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東日本大震災研究交流会研究報告書	6. 最初と最後の頁 13 - 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日高勝之	4. 巻 115
2. 論文標題 カストロフィとソーシャル・メディア～福島原発事故自主避難者ブログの研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館人文研究所紀要	6. 最初と最後の頁 249～276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Katsuyuki Hidaka
2. 発表標題 Japanese Media and the Intelligentsia after Fukushima
3. 学会等名 Seminar at the Asian Studies Centre of Koc University, Istanbul, Turkey (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 コミュニケーション学に関して自身に影響を与えた研究について
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会第52回年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 E.H.カー『歴史とは何か』を読む
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会関西支部大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Katsuyuki Hidaka
2. 発表標題 Japanese Politics and Nuclear Energy after Fukushima
3. 学会等名 International Disaster Justice Workshop ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsuyuki Hidaka
2. 発表標題 The Fukushima Nuclear Disaster Ten Years On: Investigating Japanese Newspapers on Nuclear Power
3. 学会等名 25th International Conference of European Association for Japanese Studies, Ghent, Belgium (Online) ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsuyuki Hidaka
2. 発表標題 Japanese Newspaper Editorials on Anti-nuclear Power after the Fukushima Nuclear Disaster
3. 学会等名 International Association for Media and Communication Research, Annual Conference in Nairobi, Kenya (Online) ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsuyuki Hidaka
2. 発表標題 Japanese Newspapers and TV after the Fukushima Nuclear Power Plant Disaster
3. 学会等名 Workshop of the Postgraduate School of Transcultural Studies at Kyoto University ( 招待講演 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 コロナ禍を契機にしての従来型大学教育からの転換の可能性
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会2020年度秋季関西支部大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 「反原発」のメディア史を考える ~フクシマ以前/以降~
3. 学会等名 日本マスコミュニケーション学会春季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 原発言説と健康言説 ~フクシマと人生100年時代~
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会関西支部秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 「脱原発」とメタ政治的正義 ~フクシマ以降の「脱原発」メディア・ジャーナリズム言説を考えるために
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会全国大会
4. 発表年 2018年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 Katsuyuki Hidaka	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 248
3. 書名 Japanese Media and the Intelligentsia after Fukushima: Disaster Culture	

1. 著者名 Natalia Novikova, Julia Gerster, Manuela G. Hartwig, Katsuyuki Hidaka	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 272
3. 書名 Japan's Triple Disaster: Pursuing Justice after the Great East Japan Earthquake, Tsunami, and Fukushima Nuclear Accident	

1. 著者名 日高勝之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 348
3. 書名 「反原発」のメディア・言説史 3.11以後の変容	

1. 著者名 岩波書店編集部編（添田孝史、盛口満、阿部浩美、磯野弥生、清水奈名子、豊田直巳、片山夏子、林香里、菊地栄治、齋藤亜矢、阿部恭子、小沼通二、鈴木江理子、水島久光、千葉真、瀧澤あや、近藤武夫、佐伯一麦、細見和之、日高勝之他）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 108
3. 書名 3.11を心に刻んで 2021	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------